

2002年9月1日

## 社会生活の第一歩 父母を敬う

### 【聖書】申命記5章16節

5:16 あなたの父母を敬え。あなたの神、主が命じられたとおりに。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生き、幸いを得る。

### エフェソの信徒への手紙6章1～4節

6:1 子供たち、主に結ばれている者として両親に従いなさい。それは正しいことです。6:2 「父と母を敬いなさい。」これは約束を伴う最初の掟です。6:3 「そうすれば、あなたは幸福になり、地上で長く生きることができるといふ約束です。6:4 父親たち、子供を怒らせてはなりません。主がしつけ諭されるように、育てなさい。

### [序]ルールを守ることの大切さ

私たちの日常生活から今突然自動車が消えてなくなったら、非常に困りますね。先ず店屋に商品がスムーズに届かなくなり、欲しい物を好きなだけ買うことが出来なくなります。学校や会社に通うにも大変時間がかかります。全て歩かなければならないとすれば、そんなに遠くまでいけません。私たちの生活はガラッと変わってしまうでしょう。

道路に立って見ているといろいろな車がひっきりなしに走って行きます。事故が起これば人が死にます。怪我で一生不自由な生活を送らなければならなくなります。だから交通規則を皆がきちんと守らなければなりません。ルールを守る——これは私たちすべての人間が、幸せに生きていくために欠かすことの出来ない条件です。

私たちは人間です。漢字では「人之間」と書きます。いろいろな人の間で生きているからです。誰とも関係しないでたった一人で生きている人間などいません。先ず親がいなければ生まれてこないのですから。「人」という字も互いに支え合って立っている二人を表わしています。それが夫婦なのか、親子なのか、兄弟・友だち・同僚あるいは商売相手なのか様々ですが、とにかく私たちはいろいろな人と支えあう関係を結びながら、生きています。

ですからその人間関係がうまくいかどうかで、私たちは幸福になったり、不幸になります。車と同じで、お互いにルールをきちんと守らないと事故が発生します。私たちが生きていく上でどうしても守らなければならない基本的なルール——それが今学んでいる十戒です。

十戒の特徴は、目に見える人間同士の間のルールの前に、先ず見えない神さまに対する私たちの態度を教えている点です。神さまとの正しい関係を結ぶ時に、人間同士も正しい関係をもって生きていく事が出来ると考えるからです。そのことを今日は親子の関係についての教えから学んでいきましょう。

### [1]子どもは宝か

我が家は5人の子どもとわたしの両親の9人暮らしでした。家内は大変でしたが、でも大家族でわいわい楽しい暮らしでした。しかし子供たちは必ずしも楽しいとは思っていなかった

ようです。4 番目が小学校上級になった頃でしょうか、この家から出て行きたいので自分を養子に出してくれと言い出しました。「どうしてもこの家には居たくない」と言い張ります。「ではどんな家の子どもになりたいのか」と聞きましたら、「他に子どもがいなくてお金持ちの家」と言います。「それはダメだ。甘やかされて贅沢したら碌な人間にならないから」。そうしたら「貧乏で子どもが沢山いてもいいから、探してくれ」と言いました。よほど出て行きたかったのですね。

そうです。子どもは親を選べないのです。父や母がこんな人だったらどんなに幸福だろうと我が子も思っていたのでしょうか。こんな親で申し訳ないなと思いました。でも親だって子どもを選べません。確かに自分の意志で生みましたが、こんな子だったらいいのにとする親の願いと現実の子どもとは随分違います。これから先どんな人になり、どんな人生を送るのか育てていながら、全く見当が付きません。ただただ幸せな生涯を送って欲しいと願うのみです。

このように自分の好みで選べないという点では同じでも、普通の親なら我が子が可愛い、宝物だと思える自然の情愛を持っています。ここが親と子の違いかもしれません。日本最古の歌集「万葉集」に、その親心を歌った山上憶良(ヤマノウエノオクラ)の有名な歌があります。「銀(シロガネ)も金(コガネ)も玉も何せむに、まされる宝、子にしかめやも」。子どもは金銀財宝にまさる一番の宝だということです。

ところが一方では子どもは親のものだという考え方もあります。北海道の遠軽に有名な「家庭学校」があります。以前は非行少年の更生施設でしたが、今は欠損家庭の子ども達の保護施設になりました。創設者の留岡幸助先生は少年時代にクリスチャンになりました。明治の初期 120 年余も前の岡山県の田舎のことです。困り果てた父親が、町の警察署長にクリスチャンをやめるよう説得してもらいました。でも彼は頑として信仰を捨てません。そこで署長は父親にこう言ったそうです。「金助、こんな子はダメじゃ。連れて帰れ。しかし子は親のものじゃから、煮て食おうが焼いて食おうが、親の勝手じゃ」。子は親のものだからどう扱おうと親の勝手だったのですね。

子どもはどんな金銀宝石よりも大切な宝物だという考えと、親が自由に扱える親のものだという二つの考え方が、日本の社会にはず一つとあったのです。どうしてでしょうか。皆さんはこれについて考えたことがありますか。

砂漠の民は財産を貴金属・宝石に換え、身につけて生活していると聞きました。シンガポールでも金の装飾店が実に多いですね。お金が出来ると金製品を買うそうです。銀行はつぶれるかも知れません。戦争が起きたらすぐに逃げ出さなければなりません。ですから身近に持つ貴金属・宝石類の方が、いざという時にはそれを売って我が身を守るのに役立ちます。

そこで子どもは親の宝だと言ってしまうと、いくら大切だといっても、いざという時には親が自分を守るために取り扱う程度のものだということになります。基本的には子どもは親の都合

のいいように扱えるものなのです。これではどうも変です。「親に育ててもらった恩に感謝しろ」というのでしたら、子どもの方からも言い分が出てきます。「何も生んでくれと頼んだわけではない。勝手に生んで自分の育てたいように楽しんでおいて、感謝しろというのか」子ども達にこう言われた時、親はなんと行って反論するのでしょうか。

## [2]神からの嗣業

これに対して神さまとの関係から物事を考える聖書の教えは明快です。「見よ、子らは主からいただく嗣業」(詩篇127:3)。「嗣業」とはユダヤ人にとっては具体的に、親から子・孫へと受け継がれていく土地を意味しました。落ち着ける場所を持たず、根無し草のようにさすらう不安定な生活をしてきたユダヤ人たちにとって、子や孫や子孫代々にわたってずっとそこで暮らしていける、そして栄えていけるという土地を持つことは、心からの願いでした。そしてそれは神さまから恵みとして与えられる賜物だと、ユダヤ人は受けとめました。ですから嗣業の地は、自分の都合で簡単に手放してはいけません。必ず子から孫へと受け継がせていかなければなりません。

ここに山上憶良が歌った「宝」と、詩篇が歌った「嗣業」との根本的違いがあります。宝は、いざという時に我が身を守るために処分できるもの。嗣業は自分ばかりでなく子孫代々にわたって根を下ろし、栄えていくために与えられた相続地なのです。宝は一時的な所有物、嗣業は将来にわたって生きていく地、場所。ですから「子どもは嗣業である」とは、親が勝手に取り扱えないもの、自分ばかりでなく、子も孫も身を置いていく大切な場所、我が家の拠りどころなのです。

我が子には自分の生涯だけでなく、孫や子孫の栄えがかかっています。だから親は我が子を、親に対してばかりでなく、自分の後に続く自分の子や孫に対する責任を自覚させて、その責任を果たしていく者に育てていかなければなりません。

一方、子どもの務めも聖書の教えは明快です。「あなたの父母を敬え。あなたの神、主が命じられたとおりに。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生き、幸いを得る」神が与えられる土地とは「嗣業」のことです。その土地で子どもが生まれ、育ち、豊かに実っていくならば、親も子も、また後に続く孫達も幸せになります。その意味で子どもは親にとって神さまからいただく嗣業であると同時に、親も子どもにとっては神さまからいただいた嗣業なのです。

親子はどちらも自分の好みで選ぶことが出来ません。自分で選ぶ前に既に決められています。偶然そうなったのでしょうか。偶然決まったものならば、何もこだわる必要はありません。嫌なら変えればよい。でも親が気ままに子どもを捨てて他の子を自分の子にすることが出来るとしたら、小さな子どもにとって大問題です。いつもびくびく親のご機嫌を伺って生きていかなければなりません。

しかし神さまを信じる者は、神さまが深い愛と知恵をもってお決めになった組み合わせだと

受けとめます。神さまからいただいた嗣業としての子であり親ですから、私にとって一番よい恵みです。どうしてこれが恵みなの、チットモそう思えないという場合でも、それは自分の心や考えが未熟だから今そう思うのであって、心や考えがもっと豊かになれば、神さまのお考えが分かってくる。その時が来るまで神さまを信じて、親や子を大事にしながらか待っていて、と考えます。そして神さまが与えて下さった親だから、子どもは敬うのです。また親は子どもを尊ぶのです。神さまを抜きにしては、敬うとか尊ぶ理由は見出せません。

「ゴーマニズム宣言」や「戦争論」で話題をよんでいる小林よしのりのマンガの中に、親に対する今の子ども達の態度が、「我慢ならない！ゆるせない！」と告発されています。(新ゴーマニズム宣言6:第67章) 小学5年生くらいの男の子が、コンビニで母親にイライラしてつかかっている場面です。

「ったく 早くしろよ モタモタしやがってよー」「だって今買っておかないと おにぎりだっているでしょう？ 夜 おなかすいたって 言わない？」

「んなの ハラへったらへったで また買いにくりゃいいだろーよ テメーがよオ」「ジュースも買っておこうか どっちがいいの？」

「こっちだよ そんなもの どっちだっているんだよ ったく モタモタ モタモタしやがって早くしろ！」

こんな子どもが大きくなったら、老いた親に対してどんな態度をとるでしょうか。目に見えるようです。旧約聖書の箴言に、こんな教えがあります。「父に暴力を振るい、母を追い出す者は、辱めと嘲りをもたらず」(19:26)。「父母を呪う者、彼の灯は闇のただ中で消える」(20:20) 昔のイスラエルにも、親を口汚くののしり、暴力を振るって追い出す者が居たのですね。神殿への供え物を口実にして、親への援助が出来ないと言っている者を主イエスも非難しています(マルコ7:11~12)。

オランダには「一人の貧しい親が 10 人の子どもを育てる方が、10 人の豊かな子ども達が一人の親の世話をするよりも易しい」という格言があるそうです。シンガポールも7年前に、経済的に困っている親を支えない子どもを親が訴えたら、処罰される法律が施行されました。親と子という一番身近な関係が、昔から今に至るまで実に情けない状態をさらけだしています。侘しい私たちの社会の現実です。

聖書は親子の関係を、子が生まれてから独立するまでの期間に限って見ていません。親が老い衰えて死んでいく時期に、子どもが親をどう支えるかも見ています。そしてそれが、子ども達と孫との関係へと連なり、ずーっと子孫にまで及んでいくと見ています。嗣業なのです。

小林よしのりが描いた親子。この子は多分老いた母親を口汚く罵りながら扱うでしょう。そしてそれを見て育った我が子から、同じ扱いを受けるでしょう。我が子を正しく育てなければ、長く続いて栄えていく幸せ(嗣業)とはならないのです。

### [3]権威に服従する

父母を敬うの「敬う」はヘブル語では、「重くなる」という意味の語で、それから「重んじられる」「貴ばせる」に使われました。ですから父母を敬うとは、父母の立場や言葉を重んじること、その権威に従うことを意味します。親の権威を認めて、その指示に服従するのです。

私は剣道を教えていますが、初心者には先ず私の教える通りに服従してもらいます。生徒が嫌だ、自分はこうやりたいと言っても認めません。学ぶとは真似ることだと言われていますが、私が長年修業してきてこれが良いと思っていることを、とにかく先ず身につけてもらいます。その上で自分の個性に合ったやり方を工夫してもらいます。これは剣道だけでなく、あらゆる学習に当てはまることでしょう。

ところが服従は、その人を心から尊敬できる時なら問題ないのですが、心に反撥がある場合には強制されているようで苦痛です。自分で納得できないこと・良いと思えないことには服従できません。その時神さまを畏れる者は、神さまから立てられた権威だからということで、親に対して敬意を払い、服従します。とにかく先ず親を通して神さまから大切なことを学びとるのです。

マルチン・ルターが宗教改革を始めて46年経った1563年に、ドイツのハイデルベルクで改革派の信仰を簡潔にまとめた信仰問答が出来上がりました。これは今でもプロテスタントの諸教会でよく学ばれているものですが、十戒の第五を次のように解説しています。

「第五戒で、神は何を望んでおられますか」。「私が私の父や母、またすべての上に立てられた人々に、あらゆる敬意と愛と誠実とを示し、すべてのよい教えや懲らしめには、ふさわしい従順をもって服従し、彼らの欠けをさえ忍耐すべきである、ということです。なぜなら、神は彼らの手を通して、私たちが治めようとなさるからです」(問104)。

おわかりのように、16世紀にヨーロッパで宗教改革をすすめた教会は第五戒を、父と母に限らず社会で私たちの上に立つすべての人に広げて、その権威に服従する教えと受け取りました。当時のドイツは神聖ローマ帝国の皇帝の下に7人の選帝侯がそれぞれの領地を治めている封建社会でした。ですから皇帝や選帝侯の権威に服従することが、社会の秩序を保つ上で欠かせませんでした。

でもそのような歴史上の制約はあったとしても、社会の権威に対して私たちがどのような態度をとるべきかは、大変大事なことです。私たちが暮らしている社会には、私たちに命令や指示を与えたり、監督・指導する権威をもった人が私たちの上に置かれているからです。大統領・王・総理大臣・市長や監督官庁の担当者、職場の社長・重役・直接上司、また学校の校長・主任・担任教師等々です。学校を卒業して会社に入った人も、次の年には新入社員が入ってきてその上に立つ者になります。

それらのすべてが立派で誤りの無い指導をしているかといえば、親と同じで敬意を持たず、心から従えない場合も多いのではないのでしょうか。でも「彼らの欠けをさえ忍耐すべきである。なぜなら、神は彼らの手を通して、私たちを治めさせようとなさるから」と教えています。これはすごい言葉ですね。

政治の世界では権力闘争が激しく繰り返されます。自分の主義主張が通らないと、相手を殺してとって代わろうとします。でも自分が天下をとれば、理想どりの社会が実現するのでしょうか。いいえ、破壊は破壊を呼び、社会は混乱を深めます。もっと忍耐して現在権威を委ねられている者に十分能力を発揮させ、神さまが彼を通して治めさせようとしておられることを期待する態度も、大事ではないのでしょうか。

私たちは皆罪を犯すものです。しかし神さまは私たち人間の犯す悪を善に変えて、救いの業を進めるお方です。批判や反対を正しく意志表示して誤りを正そうと努めながら、なお上にたつ権威に服従するという信仰問答の勧めを、私は支持いたします。

### [結]神の前に身を置きながら

今日は親子という私たちにとって一番身近な人間関係についてのルールを学びました。親は我が子を生みました。しかし子どもは自分の思い通りに扱える自分のものではありません。自分も子も孫もそこでずーっと生きて栄えていく土地に当たる、我が家の拠り所です。神さまから与えられた大切な嗣業ですから、親の勝手に処分できません。

子どもも親を選べません。しかしこの親の下で人間として正しく生きていくルールを学び、成長するようにと神さまが私にお与えになったのです。その親と自分との良い関係を、自分の子や孫に伝え、皆が幸せに栄えていかなければなりません。親と自分との関係は、そのまま自分の子や孫へと伝わっていきますから、親は子どもにとってもずーっと続く嗣業です。

私たちは神さまがお与えになった親の権威を重んじ、親の教えに服従します。そして親を通して神さまから大切なことを学びます。このルールは家庭内に限られるものではありません。社会には、私たちに命令や指示を与え、監督・指導する人が立てられています。その人たちに対する私たちの態度にも当てはめられるルールです。

上に立てられた人がすべて立派で誤りの無い指導をしているわけではありません。親と同じで、皆欠点を持っています。誰が権力をとっても理想がすぐ実現するものではありません。ですから批判や反対を正しく意志表示して誤りを正そうと努めながらも、現在立てられている者の権威に服従し、神さまが彼らを通してなそうとしておられることを期待していくことも大事ではないのでしょうか。

親とか子、敬うとか従うということは、神さまの恵みの光の下ではじめて正しく受けとめることが出来ます。神さまの前に我が身を置いて信仰を深めていきながら、良い人間関係を持ち、豊かな人生を送っていきたいものです。 完